

第1回 下水道への紙オムツ受入実現に向けた検討会 議事概要

日 時 平成30年1月31日（水） 15:00～17:30

場 所 経済産業省 別館 231各省庁共用会議室

議事概要

（下水道への紙オムツ受入の検討の意義・効果、ターゲット等）

- 在宅介護であればオムツを使う期間は限られるが、高齢者向けの施設では常に使えるシステムであり、介護に携わる方々の負担の軽減に対して意義があると思う。
- 介護、ごみ行政における紙オムツの処理に関する具体的な課題が分かれば、下水道への紙オムツ受入のドライビングフォースがより強まる可能性がある。
- 介護施設等で廃棄される紙オムツは事業系廃棄物として処分されているので、一般家庭への導入が現実的であると思われる。
- 紙オムツを下水道に流すことによほどのメリットがないと、既存の廃棄物処理システムからの切り替えは進まないと思われる。
- 下水道がない地域や下水道に流せない地域でも、紙オムツが簡単に処理できる社会システムの構築に向けて、環境省とも連携すべきである。
- 先に別の委員からも発言があったように、下水道への紙オムツ受入のシステムができればニーズはあると考える。したがって、こうしたシステムが導入された住宅の価値が高まることが想定される。
- 紙オムツの素材にも幅があり、どのような素材・成分がどのくらい入ってくるのかなど、さらに調査を深める必要がある。

（下水道管理者における課題等）

- 下水道への紙オムツ受入のメリットだけではなく、下水道施設等に与えるデメリットも示すべきである。また、実現できる下水道管理者とそうではないところがあるということを示すべきである。
- 伏越しや緩勾配が多い都市部の合流式下水道では、紙オムツなどの塵芥物による管渠のつまりにより浸水のおそれがあるため、オムツの受入は困難である。
- 下水道の既存ストックに余裕があれば、過疎地等の福祉対策として検討の可能性はあると考えている。
- 下水道の施設管理者である地方公共団体からの意見を十分に聞いてほしい。
- 下水道管理者として懸念があるのは分かるが、どこまでのリスクなら許容できるかという観点も必要である。下水道の新たな価値として、社会に貢献していくことも重要である。

○集合施設に設置されるビルピットの維持管理や臭気対策に関連する可能性があるので留意する必要がある。

(実証実験等の技術面の検討)

○実際の下水道施設は理想的な施設モデルとは異なる場合もあるので、実施設を十分に想定した条件下での実証を行ってほしい。

○放流水中のマイクロプラスチックの影響についてはしっかり検討してもらいたい。

○マンホールポンプ閉塞による浸水や、処理場の流入水質変動による設備運転管理への影響が懸念される。

○下水道管理者が受入可能性の検討を行う際に、世論の期待や社会的な要請だけで受入を判断することがないように、定量的データに基づき客観的に判断できるようにすべきである。

○ガイドラインの前提となる下水道としての受入条件のとりまとめは、適切な受入条件を評価できる体制を組んで検討し定めるべきである。

○下水道への紙オムツ受入可能性の実証期間として5年で実施できるのか。どのようなやり方で実証するのか非常に難しい。

(技術開発等)

○紙オムツの受入における懸念事項は絞り込めるので、その課題を適切に解決できる機器・システムを考えればよい。

○紙オムツ処理のニーズがあることは間違いない。機器設置の目標コスト・市場調査や、受入条件を前提としたときの利用者の意識調査が必要である。

(まとめ)

○全ての地域で本システムが導入できるとは限らない。地域特性に応じて活用できるシステムを目指す。社会的に全体最適になる様なやり方が見つければよい。

以上